

# のんた

24

山口の土地改良

vol.24  
Winter 2023

21世紀の食料・環境・ふるさとを考えよう!

## ●巻頭特集

やまぐちの「農の偉業」探訪⑦

萩市 見島

## 国境離島・見島の 田んぼとため池と見島牛と

## 入選作品のご紹介

第23回食料・環境・ふるさと  
写真コンテスト

入選おめでとう!!

「ふるさとの田んぼと水」  
子ども絵画展 2021

## ●特集Ⅱ

SDGsへの取組  
～持続可能な社会の実現に向けて～

## ●まんが

まんがで紹介する  
土地改良のお仕事⑥

# 国境離島・見島の 田んぼとため池と 見島牛と

取材・文：石井里津子



八町八反の西側から本土方面を眺めた風景。海には、高速船「ゆりや」が見え、その手前にジーコンボ古墳群が広がる

山口県萩市見島——日本海に面した萩港から北へ約45km。高速船に乗って70分ほどの、周囲約18km、面積8kmもない国境離島である。人口は、2022年9月末で677人。そのうち、島の西部にある自衛隊基地の関係者が200人弱を占めると聞く。

昭和30年代には約3千人が暮らしていた。かつては水田が百町歩以上あり、米が百俵も収穫できていたというから驚きである。なぜなら、見島には高い山もなく川もない。ため池群と天水のみで耕作し続けてきた田んぼなのだ。

3年ぶりに見島へ向かった。2020年にコロナウイルスによるパンデミックが起こり、病院のない見島に渡るのは難しくなっていた。

「ゆりや」に乗船する。9月2月は一日2便のみ。北へと広がる日本海は、進むほどに波が高くなり、船は、繰り返し高波にどんと当たっては、ぐぐぐと持ち上げられ、ドーンと落ちた。

この日は、接岸するまで揺れ続けた。ふらつく足でタラップを降りる。こぢんまりとした港に人々が集まり、積み荷を受け取ってゆく光景。以前と変わらない。船酔いを鎮めるため、しばし港の待合所の長椅子に腰掛けた。

「時化とったやろ。今日は、漁師も海に出とらんよ。船が新しくなったゆうても、海は変わらん。海は昔も今も同じや」帽子をかぶり、マスクをした島のおばちゃんの話しかけてきた。見知らぬ人

だったが、70歳代ぐらいだろうか。新聞か荷物を港まで取りに来たのだろう。見島で海のような話を話すのは、挨拶がわりだ。何しろ、海の荒れ具合に生命がかかっている。海が荒れると、漁には出られず、食料の運搬もなく、島は孤立する。見島ではそれが幾日も続くこともあるのだから。

## 八町八反の ため池群のゆくえ

2022年10月末、八町八反の耕作断念ぶりは加速しているように見えた。かつて話を聞かせてくれた耕作者が亡くなったたり、病気で離農していたり、高齢で島を離れたり……。コロナもあって、外部の手を頼ることが難しく、転がり落ちるようだった。



国指定史跡のジーコンボ古墳群。7世紀後半から9世紀末にかけてのもの。朝鮮半島で起きた白村江の戦いのころ、国を守るため、国境離島である見島に移り住んだであろう律令官人の家族墓



田んぼの隅を利用して、かつては夫婦2人一組となり、「水かえたご(水汲み桶)」で水を汲み出していた。八町八反は砂地で内側は石組み。石垣の丸石は、浜で拾ってきたり、地中から出たものを活用したりしている。スキに覆われてきた

## 千年の田んぼ「八町八反」

日本海の荒波の向こうに田んぼの多い、小さな島があると聞いて訪れたのは2003年のことだ。20年も前になる。はじめて見島の最も広い水田「八町八反」(字名。8・8haの意味だが、実際には12haほどある)を案内してもらったときの驚きは忘れられない。一見何の変哲もない田園風景にもかかわらず、田んぼの隅に三角形をした小さなため池が掘られてあり、一歩なかに入ると、それは次々と現れた。しかも、島独自の水汲み桶を使い、夫婦2人一組で水を汲みあげ、田にかけていたという。いまだにこんなため池群に出会ったことはない。

その後、2016年春に見島を再訪し、なぜこのような独特の景観となったのか謎を追いかけていった。結果、千年以上前に律令国家が日本中に敷いた土地区画制度「条里制」の地割がそのままの姿で残されており、河川による水源がないなか、「ザル田」といわれる砂地の土地で、小さなため池の水を繰り返し利用する、独自

の水利スタイルを築き上げていたことが見えてきた。

では、いったい誰が? どんな賢人がいたのか。ちょうど八町八反の目の前に国指定史跡の「ジーコンボ古墳群」が200基ほど横たわっている。謎の多い古墳群だったが、研究者たちから話を聞いていくと、7世紀後半〜9世紀末の、律令官人一族の子どもを含めた家族墓であり、追葬もなされ、何百人という人が眠っていることがわかってきた。

つまり、一族の食い扶持を賄う農地が必要だったはずなのだ。海の真っ只中にある見島で、食糧の自給自足は切実な願いだったのではないか。史料はなく、考古学的な確実な資料もまだないが、状況証拠からすれば、ジーコンボ古墳群の豪族たちが開田に関与した可能性は高い。条里の地割は、国内で10世紀に入っても作られたが、その後は姿を消した土地区画だ。よって条里の地割を持つ八町八反は、千年前には開田されていたといえる。千年という時間の価値——お金で買えない価値を持つ宝が見島にはある。

おびただしい数の小さなため池は、生い茂るススキなどに覆われ、確認しづらく、近年改修されたであろう、比較的大きめのものばかりが目についた。

何人かの耕作者はここ2年ほどのあいだに耕作をやめていた。国の「農地・水・環境保全向上対策」(現在の「多面的機能支払制度」と「中山間地域等直接支払制度」)の継続を止めたことが大きいという。5年ごとに更新する事業だが、5年後の未来予想図を思い描くことができなかつたのだ。八町八反の耕作者で、見島公民館長の天賀保義さんが言う。

「年配の人はもう5年やれるかどうか、そういう人が増えました。自分がやれんようになったら残った人に迷惑をかけるから、と言って……」

島の中心の本村集落全体で、集落協定

を結んだ当初は50人いた農家も25人となった。

萩市立見島小中学校も存続の危機にあった。2023年4月からは、小学生3人、中学3年生が3人。一年もすれば中学生がいなくなるのだ。見島には高校はなく、本土に下宿しての高校生活となる。

### 見島のため池群と宇津の棚田

見島には棚田も多い。ここは18世紀にすでに耕作面積が百町歩を超えていたが、棚田など山手の開発が進んだことが大きい。ちなみに棚田のことを見島では「段飾りの田んぼ」と呼ぶ。最近はその言葉すら消えてしまっそうだ。

島内の代表的な棚田といえは、「宇津の棚田」である。「やまぐちの棚田20選」にも選ばれた、見事な棚田が広がっている。宇津集落は、本村よりも新しく、江戸時代初期の開拓だという。

港近くから斜面を迫り上がってゆくように開田された宇津の棚田。宇津地区の田んぼは粘土質で、米は美味しいという。ただ、宇津は地下水に恵まれず、掘っても海水が出るのだそう。一方で、湧き水があり、それを利用してきた。

宇津の棚田の耕作者は10人程度。半農半漁というのが宇津集落の昔ながらのスタイルで、ちょうど海が時化て漁に出られないこの日、草刈りや畑仕事に精を出す姿を見ることができた。

さらに、山のなかへ入っていくと、大きめのため池は姿を見せるが、小さなた

め池はもう藪のなかのようだった。

粘土質のところのため池は、素掘りだという。そうでないところは崩れる心配があり、石を組むなど手が込んでいる。八町八反のような砂地の土に掘られたため池は、その内側すべてが石垣だ。

天賀さんが山のなかのため池を案内してくれながら話す。

「山の方のため池は、水が漏らない粘土質の土のところに掘ってあるんです。自分ちの山のため池を崩したとき、池の淵から下までそこだけが粘土質でした。昔の人は経験からわかっていったんでしょかね。どう見極めたんでしょね」

かつて、見島には250個ものため池があったという。だが、個人所有のものばかりで本当の数は不明なままだ。



耕作放棄地が目立ちはじめた八町八反。田んぼの隅の小さなため池が見えづらい



見島公民館長の天賀保義さん。八町八反の耕作者。見島取材の強い味方だ



見島ダム。2002年に完成した、主に上水道・治水を目的としたダム。総貯水量12.5万㎡。堤高31m、堤頂長300m。レアなダムカードは人気がある



「やまぐちの棚田20選」にも選ばれている宇津の棚田。営農は比較的良好に継続されているように見えた。夏、青い海、石州瓦の朱色の屋根、緑の稲のコントラストが素晴らしい(2018年6月撮影)



晩台山の放牧場からの眺め。この牧場は5ha以上の広さがあり、島全体を眺望できる。見えているのは宇津集落

### 見島牛と多田一馬さん

そしてもう一つ、語らねばならないものがある。日本で最も古い姿を残す和牛の原型として国の天然記念物に指定されている見島牛だ。農耕牛として重宝されてきたが、昭和30年代後半から機械化が進み、約30頭まで減少。1967年に見島牛保

存会が発足し、保存が進められてきた。

遠い昔、どのタイミングで牛が離島に連れてこられたのだろうか。わたしはそれを、田んぼの開拓と重ねて見ている。牛は、耕作の動力である。八町八反に残る条里地割の田んぼは、一辺が約109mという細長い短冊型。これは、牛や馬を使って農作業を一気に行うのに適して



見島牛は国指定の天然記念物。日本で最も古い姿を残す和牛。多田一馬さんは見島牛保存会の3代目会長

いる。

古代において農地の開発は、牛や農具(鋤)といった新しい農業スタイルとセットだったはずで、この島に同時に入ってきたのではないだろうか。そこから見島牛は、八町八反の開田と切り離せないのではないかと考えている。

見島牛保存会の会長、多田一馬さんの牛舎へ行く。八町八反の東側の晩台山にある放牧場だ。現在ここには約20頭いるという。多田さんは、家の方にも牛舎を持ち、計40頭ほどを飼育する。

「種の保存には100頭の雌牛が必要なんです。今ようやく80頭ですよ。そこからがなかなか。雌牛は3〜15才くらいまでのあいだに出産する。良くて20才くらいまでかな。保存のために、雌牛は100%残すんですよ」

生まれた子牛の雌は残すが、雄は、種雄牛以外は10ヶ月で出荷。本土で2年間肥育され、希少な肉として出荷するという。

「見島牛は、現在の和牛と比べて、お尻が小さく、体の前駆部分、肩の前辺りがしっかりとっているんです。八町八反のような広いところでも、棚田のような狭いところでも、隅でうまく旋回するんです。小走りもするし、力持ちで小回りも利く。農耕に最適な牛だよ」

雄牛は圧倒的に力強い。雌牛が大きくても体重約350kgに対し、雄牛は600kg近くになるといいます。

「牛との力比べですよ。こつちも高齢になつてきて、腕力がないと牛に押されてしまう。牛も自分のほうが強いと思つたら、押してくるからね」

牛の移動や人工授精時など、力が必要なたため、多田さんは、若い力の重要性を感じていた。

### 希望の1ターンの花田康章さん

そんな見島の希望が1ターンの花田康章さんだ。2019年3月に地域おこし協力隊として北九州市から訪れた。3年間の任期を終えた現在、見島牛の飼育をはじめ、さまざまなことに挑戦している。

「ここに決めた理由はいろいろありますが、下見に来たときに、保存会の多田会長の志に打たれました。儲からない仕事ですよ。けれど、唯一無二のものであった。牛を飼ったことはなかったですが、見島牛には見島牛の飼いがあって、ほかの知識がない分、そのやり方がすつと入ってきました。見島牛を自分で飼いだしたの、見島に来て1年経つてからです」



### 山口県知事賞

『玉ねぎゴロゴロ』 山口市佐山  
末廣和夫 (山口市)

玉ねぎが掘りおこされゴロゴロ!! 向うは掘りあげりコッチはこれから。一部は学校給食になっています。



### 山口県地球人会議会長賞

『漁港の赤いカーペット』 長門市通  
河野サエ子 (下関市)

赤いカーペットが敷かれたようにせいらうが美しく並べられているシラスの天日干しに感動しました。

# 第23回 食料・環境「水・土・人・暮らし」ふるさと写真コンテスト

一般の部 入賞作品のご紹介

Furusato Photography Contest 23rd

山口県内の農山漁村の良さを再発見していただくとう「水・土・人・暮らし」をテーマに、平成11年度から始まった「食料・環境・ふるさと写真コンテスト」。23回目を迎えた昨年度は、8月から12月にかけて募集を行ない、県下各地から農山漁村の風景や生き物、人々の営み、伝統文化などを撮った623点の作品の応募がありました。

すばらしい自然や文化が数多く残る農山漁村は、まさに私たちの、そして生き物たちの心通うかけがえのないやすらぎの地、次世代に残していきたい宝です。入賞作品22点をご紹介します。

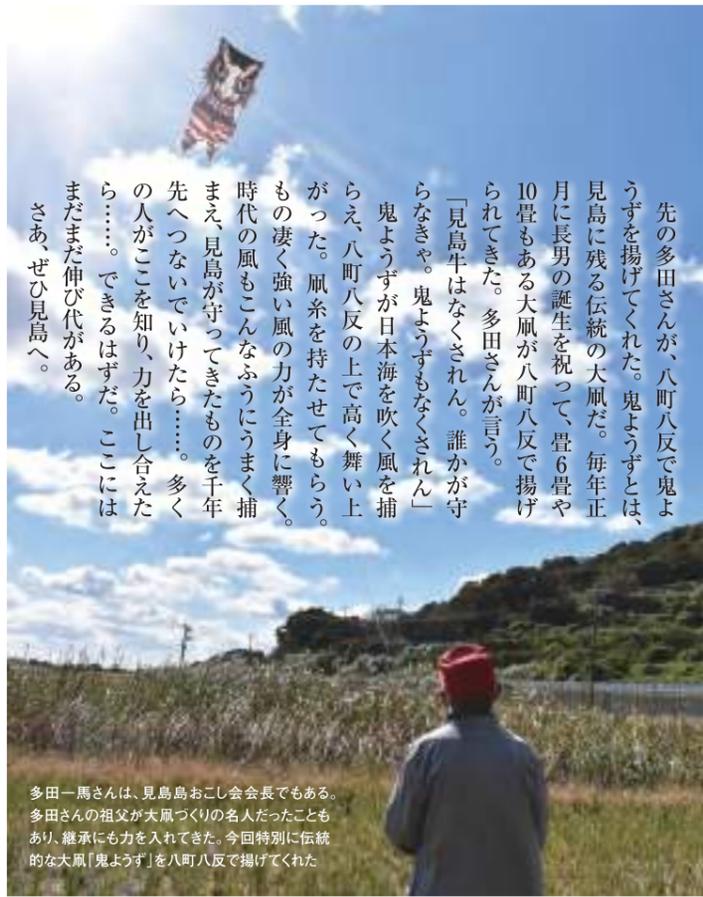


花田ファームで。花田康章さんの活動の一つ。野菜作りに自衛隊の家族が参加するなど、コミュニティの場づくりもしている

キロと必要です。生餌はほとんどが水分だから重い。でも、借金してまでのリスクは背負えませんが、自分でできることは自分でしているんです」

子どものころから島や海、釣りが好きだったという花田さん。今も夜は5時間ほど丘から釣り糸をたらず。

「牛の飼育に休日はないですが、夜は自由なんです。ここは、やりたいことや興味あることが何でもできる。これまでもハーブを食べさせた『ハーブウニ』の養殖実験をしたり、シイタケを作ったり、『花田ファーム』と名付けて、みんなが野菜作りをしたり。今後は車エビの陸上養殖なども」



先の多田さんが、八町八反で鬼ようずを揚げてくれた。鬼ようずとは、見島に残る伝統の大風だ。毎年正月に長男の誕生を祝って、翌6畳や10畳もある大風が八町八反で揚げられてきた。多田さんが言う。

「見島牛はなくされん。誰かが守らなきゃ。鬼ようずもなくされん」

鬼ようずが日本海を吹く風を捕らえ、八町八反の上で高く舞い上がった。凧糸を持たせてもらうもの凄く強い風の力が全身に響く。時代の風もこんなふうにくまなく捕まえ、見島が守ってきたものを千年先へつないでいけたら……。多くの人がここを知り、力を出し合えたら……。できるはずだ。ここにはまだまだ伸び代がある。さあ、ぜひ見島へ。

多田一馬さんは、見島島おこし会会長でもある。多田さんの祖父が大風つくりの名人だったこともあり、継承にも力を入れた。今回特別に伝統的な大風「鬼ようず」を八町八反で揚げてくれた

花田さんは「ここには、不便以上のメリットがある」と言い、目を細めた。

そんな花田さんが「八町八反(見島)の米から日本酒づくりをやりましょう」と言う。江戸時代に見島で醸造された酒が銘酒として藩に珍重されていたことを裏付ける史料もあり(コラム「見島フォーラム」での樋口尚樹氏の報告参照)、八町八反での酒づくりを実現させようというのだ。新しく懐かしい見島の酒を味わえる日も近いだろう。

■主な参考文献  
『千年の田んぼ 国境の島に、古代の謎を追いかけて』  
石井里津子著(旬報社)2017

## 「見島フォーラム」開催

2022年10月29日、19時から見島ふれあいセンターで「見島フォーラム」が開催された。聴講者は50人ほど。メイン講演は「見島と共に生きる会」(2020年発足)が萩ジオパーク推進協議会の助成を受けて八町八反のため池の築造年代を調べた調査の結果報告である。

同協議会の伊藤靖子さんによる「見島の成り立ち」に続いて、萩博物館の川原康寛さんの「八町八反周辺の生物相」の発表。最後に「見島と共に生きる会」の樋口尚樹さん、萩博物館が「八町八反・溜池の洞木・木杭の年代測定をめぐって」を発表。年代測定を提案した技術者・佐野明子さんも山梨県から参加した。

2022年2月26、27日に、電動ポンプでため池の一つから水を抜き、重機でへドロを除去し(2021年11月に人力で実施したが、胴木に到達できず)、木杭を確認。そして、胴木と木杭から木片を削り、放射性炭素年代測定のため会社へ送付した。

年代測定の結果、江戸時代の1700年代中頃と判明。ため池改修がこの時期に行われたのではないかとのことだった。また、ため池改修の記録は、個人所有のため、萩藩の史料にはなかったという。その一方、江戸時代の「御両国珍産物」に「見島酒」の記載があることなどを紹介。藩内名酒3つの中のひとつというから名高い酒だったようだ。



八町八反のため池内の胴木から木片を採取するようす  
写真提供:見島と共に生きる会



『大漁だよ!!』 岬漁協  
林 良子 (宇部市)

漁協で漁師さんの笑顔と大漁の魚を一コマに収めました。新鮮な魚を食する事が出来るのも漁師さんのお陰です。



『日没』 光市室積海岸  
小西富喜子 (光市)

フィッシングパークの上で釣りを楽しむ人々、新しいウォータースポーツのサップを漕ぐ人々、おだやかに夕日が沈む室積海岸での一刻です。



『今年は豊作だ』 周南市中須  
山本由里子 (周南市)

昨年の稲作はウンカの被害を受けられたいへんだったでしょう。でも今年はとてもいいできばえで喜んでいらっしゃるだろうと感じました。



『共生』 山口市秋穂  
田中幸恵 (防府市)

うしの廻りに白サギ。みんなリラックスしてこちらまで癒やされました。



『稲刈りのあとのほなし』 下関市豊北町  
吉岡岳志 (山口市)

山陰本線の観光列車「〇〇のはなし」を撮る場所を探していたら、稲刈り後の田んぼに巨大なマシュマロみたいな物が置いてありました。稲ホールクラブサイレージというらしいのですが、良いアクセントになってくれました。



『生命の水やり』 山陽小野田市埴生  
谷野 隆 (山陽小野田市)

植えて間もない苗に水やりをしている様子です。水が無いと育たないので大事な作業です。



『水澄む』 岩国市吉香公園  
西村 勇 (岩国市)

公園の噴水を逆光で。噴水の放物線に陽の光が直線で人を入れて楽しみました。



『補植』 周南市米光  
渡邊壽久 (下松市)

毎年、息子夫婦が帰り、トラクターで田植え作業を手伝ってくれる。しかし、どうしても斑があり、均一にするためには手で補植する必要がある。聞けばこの農婦も代々の田を守り80才を優に越えている、と云う。のどかで愛着を感じさせてくれる。



『コロナ終息を願って』 山口市大内管内  
岡本公一 (山口市)

今年のわらで神社のしめ縄を地区の人が集まり作っていました。新年を向かえる準備です。



『田んぼアート』 下関市豊北町滝部  
磯部彰六 (下関市)

朝の陽光で収穫後の田んぼに切株から生えた芽と人影が映り、まるでアートのようにシャッターを切りました。



第23回

# 食料・環境「水・土・人・暮らし」 ふるさと写真コンテスト

入賞作品のご紹介



## 水土里ネット山口会長賞

『田んぼの草取り』 田布施町別府  
國本悦郎 (熊毛郡田布施町)

近所の高齢者が、除草剤に頼らず、昔ながらの手押しの草取り機で黙々と作業していました。こんな光景は滅多に見られない姿と思い、直ぐにカメラを取りに帰りました。



## 山口新聞社賞

『歓喜』 下関市豊田町  
財満眞千子 (宇部市)

じゃがいも掘りをしている様子を撮影しました。勢い良くじゃがいもを引き抜いたら、じゃがいもは土の中で葉・ききだけで拍子抜けの歓喜の声を発しているのがとてもおもしろい瞬間でした。



## 中国新聞防長本社賞

『無病息災を願って!』 下松市久保出合  
瀬畑美智夫 (下松市)

毎年、お米を作っています。刈り取った稲は、はぜかけにして天日干しします。脱穀した稲のワラを使って連日のように「しめ縄づくり」に励んでいます。来年の人々のコロナ禍のない無病息災を祈願して、かざってもらいます。でも息子の私には、ちょっと伝承は難しいかも?





Congratulations!!  
 入選おめでとう!!  
 「ふるさとの田んぼと水」  
 子ども絵画展2021

主催:全国水土里ネット・都道府県水土里ネット

小学生以下を対象に開催される「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展。2021年の絵画展には、「新発見! わたしたちのふるさと自慢」のテーマのもと全国から4、120点の作品が寄せられました。山口県からは3名の方が入選・入賞され、1名の方が佳作となりました。おめでとうございます!!



入選  
 「自然を大切に」  
 山口市立宮野小学校3年 清水星汰さん



水土里ネット山口 会長賞  
 「おじいちゃんの稲刈りは最高!」  
 山口市立宮野小学校5年 堀上紗也佳さん



佳作  
 「母の時代から変わらぬ景色」  
 山口市立宮野小学校4年 小森華愛さん



入選  
 「田植えをするおじいちゃん」  
 山口市立宮野小学校6年 岩本乃音さん



『そばが出来るのを  
 楽しみにしているバツタ』 周南市鹿野  
 大谷大翔 (防府市・小学5年)  
 バツタがそばの花をおいしそうに見てるように感じたので写真をとりました。



『虫入ったかな』 美祿市  
 中村航基 (岩国市・小学4年)  
 虫がとれたので虫かごに入れているところです。



『池からひよっこり夕やけ』 山口市秋穂  
 山本彩乃 (山口市・小学2年)  
 パパとあそんだ帰り道、ため池のおこうにきれいな夕日が見れたのでとりました。

Furusata  
 Photography Contest  
 23rd

主 催 / 食料・環境・ふるさとを考える山口県地球人会議  
 山口県・水土里ネット山口  
 後 援 / 山口新聞社・中国新聞防長本社  
 ※学校名、学年は受賞当時のものです。



山口県地球人会議会長賞  
 『ぼくの好きな牛』 牧場  
 賀屋蔵之佑 (山口市・小学4年)  
 親子で、子どもがかわいくて、いろいろなうしがいる。



優 秀 賞  
 『たくあん大根の天日干し』 岩国市阿品  
 相川佳穂 (和木町・中学2年)  
 たくさんの大根を干すのは大変だったけど、この風景を絶やさないように手伝っていきたいと思います。



『いねかりのあと』 おじいちゃんの家  
 村上蒼虎 (山口市・小学4年)  
 もういねかりが終わったんだなあ〜。



『だいこんとったどー!!』 平生町  
 山本晃央 (柳井市・小学4年)  
 おいしそうなだいこんをいっぱい引きぬきました。

## 土地改良事業とSDGs

土地改良事業は、自然資本である「水」と「土」に直接手を加え扱う事業です。農業生産における基礎的な資源である農地・農業用水等の農業生産基盤を整備することで、農業の生産性の向上、農業総生産の増大、農業生産の選択的拡大及び農業構造の改善を図ります。

土地改良事業は、特に以下のゴールに貢献しています。



干ばつ、洪水等に対する適応能力を向上させ、持続可能な食料生産システムを確保する観点から、

**2** 飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する



大区画化による農業生産基盤の整備



水の利用効率を大幅に改善する、水に関わる分野の管理向上への地域コミュニティの参加を支援・強化する等の観点から、

**6** すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する



農業水利施設補修による長寿命化



質の高い、信頼でき、持続可能かつ強靱なインフラ開発等の観点から、

**9** 強靱なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る



先端技術を活用したスマート農業の推進



劣化した土地と土壌を回復し土地劣化を防ぐ等の観点から、

**15** 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する



田植え体験会



事業の実施で深化が図られる農村協働力は、

**6** すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する

**17** 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバルパートナーシップを活性化する



多面活動

# SDGsへの取組

## ～持続可能な社会の実現に向けて～

世界をより良い未来に導くための重要な羅針盤であるSDGs。SDGsと土地改良事業との関連性についてご紹介します。

### SDGsとは ～誰ひとり取り残さない社会の実現を目指して～

SDGs (Sustainable Development Goals) は、2015年の国連サミットで採択された国際目標で、日本語では「持続可能な開発目標」といいます。世界中の誰もが人間らしく暮らしていくためにやるべき“17のゴールと169のターゲット”から成り、2030年までにやり遂げることが目標とされています。

### SDGsの17のゴール

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



**生産基盤の強化**  
農地の大区画化、汎用化

**農村地域の防災・減災対策**  
防災重点農業用ため池の整備

**情報通信環境整備対策**  
スマート農業の実現  
ICTによる水利施設の管理

**地域の環境保全対策**  
日本型直接支払制度の活用

**水土里ネット  
山口が支援  
します！**

山口県土地改良事業団体連合会会長  
北村 経夫

漫画工房 樹本村塾

農業従業者の減少に高齢化  
さらに肥料の高騰まで…  
本当に困ったな

そういえば新しい内閣の発足に  
新しい農林水産大臣の就任  
こんなことを言っていたわ

**第2次岸田改造内閣発足  
食料安全保障の強化**

**野村哲郎農林水産大臣就任**  
食料自給率を向上させるために  
食料生産の基盤強化

岸田首相、野村大臣も  
大きな問題として考えてくれて  
いるのね

後世に農業農村を引き継ぐために必要なのは…

**地域にあった  
農業農村整備事業が  
重要だ！！**

# のんた Photo Column



## 【カエル】

春、水を張った田んぼにはいろいろな種類のカエルがやってきます。中でも親しみのあるのがアマガエルです。つぶらな瞳に緑色の小さなからだ。愛らしい姿で子どもたちの遊び相手になってくれます。

アマガエルはごく普通に見られるカエルです。ところが、カエル全体で見ると、その種類は年々減ってきているようです。カエルは食物連鎖の中間に位置する生き物です。昆虫類やクモ類を食べ、鳥類や爬虫類、哺乳類に食べられます。カエルの減少は、この「食べる」「食べられる」という生態系のバランスを崩すことにつながります。

カエルが姿を消している原因の一つに環境の変化が挙げられます。産卵に必要な田んぼや水辺の減少が影響していると考えられています。生き物に満ちた田んぼは、子どもたちにとって絶好の遊び場です。田んぼや水辺を守ることは、長い間続いてきた子どもとカエルとの関係を守ることにもつながるのです。

発行

食料・環境・ふるさとを考える

山口県地球人会議 事務局

〒753-0079 山口県山口市糸米二丁目13番35号 水土里ネット山口 山口県土地改良事業団体連合会内  
TEL: 083-933-0033 FAX: 083-933-0048 URL: <https://www.yamadoren.or.jp/>

